

クロライチョウの生息環境選択について

田家龍・朴仁珠 ・ 丁永良 ・ 王洪斌
 黒龍江省野生動物研究所・鶴北林業局・黒河市林業局
 訳 福井和二

クロライチョウ (*Lyrurus tetrix*) は、かつて中国では狩猟鳥であった。しかし、ごく最近まで、過度の猟獲や森林伐採、殺虫剤の大量使用などで、その分布域が明かに縮小していったことにより、現在では国家二級保護動物に指定されている。クロライチョウの適応性は比較的強く、生息環境も比較的多様で、ヨーロッパアカマツ (*Pinus sylvestris* 以下アカマツと略)、カラマツ (*Larix gmelinii*) などの純林中ばかりでなく、針葉樹と広葉樹の混交林、あるいはヤナギ科の二次林、河川敷のヤナギ低木叢などでも好んで生息し、季節によっては林縁部の草地、耕地でも行動している。

1991~1999年、我々は8年間の時間をかけて、^{モンゴリア}内モンゴル自治区紅花尔基と^{タイワン}塞罕坝などのクロライチョウの生息地で詳細な観察を行なったので、現在までの結果を報告する。

生息環境とその選択利用

紅花尔基は内モンゴル自治区の^{モンゴリア}呼倫貝爾盟中南部、伊敏河上流の大興安嶺山麓森林に接し、北西に呼倫貝爾砂漠草原をひかえた森林から草原へ移行する中間地帯で、この地域の北東から西南に至る長さ約150km、幅20kmの帯状に、わが国最大のアカマツ純林がみられる。この地域の東側はよく成長したカラマツとシラカバが優勢な混交森林の低山丘陵で、その西側は一望無限の草原である。

表1により、わかることはクロライチョウが草地-アカマツ林、草地-カラマツ林、草地-シラカバ林、河岸-ヤナギ林などの中に出現率が大きく15%以上に達した。中でも草地-シラカバ林が最高、草地-カラマツ林と続き、上記4種を生息環境面積比をみると、12800:900:100000:1300=14:1:111:1.4となり、クロライチョウは草地-カラマツ林と河岸-ヤナギ林に高く出現していることがわかる。当然、草地-シラカバ林の面積は大きく、クロライチョウの絶対数は大きい、彼らが好んで生息する環境を軽視するわけにはいかない。塞罕坝森林ではより明かにこの現象が現われていた。そこでのクロライチョウの大部分がカラマツ人工純林と草地-シラカバ林中に出現していた。

冬季、クロライチョウの多くは海拔の低い山間の谷間に移り、したがって、高山での出現率は低くなり、耕地、防火緩衝地ではさらに出現率が少なくなる。しかし、春季の防火緩衝地、秋季の耕地では明かに出現率が増加する。紅花尔基地区の山は険しくはなく、ほとんどが低山丘陵で、クロライチョウがどの方向を向いた斜面を選択しているかは、明確でない。雪の少ない、日当たりのよい斜面、比較的温かく、餌を採ることがより容易である所に出現率が高い。また、日陰の傾斜で、少しでも受光率が高く、積雪が多く、ねぐらをとりやすい場所にも出現し、初冬には日向斜面で、晩冬には日陰斜面でも採食をしており、出現率が高くなる。これにより、クロライチョウは日向斜面と日陰斜面の選択性はあまり強くない。

紅花尔基の森林は海拔が高くなく、クロライチョウが山の高所と低所のどちらを選択しているかは、明らかな差を見ることはできなかった。ただ、冬季は下層域を多く選択している傾向がある。全体を通して見ると、クロライチョウは標高600~900mの間に分布するが、1900mまで生息することもある(塞罕坝)。

雪下でねぐらをとる習性を持つ鳥として、深い雪のある場所を明かに選択しており、50cm以

上の深い雪のある場所も避けない。天氣の溫暖な日は、残雪のある、採食の容易な場所に出現率が高く、雪の深さはクロライチョウの分布の制限因子とはなっていない。クロライチョウは好んで群れで行動する。村落や交通の頻繁な道路から遠く離れた場所に生息し、特に繁殖期は林縁部を好み、人と一定の距離(500m)をおき、比較的鬱閉度(0.5以上)の高い環境に生息する。これは今後クロライチョウの保護管理上重要なよりどころとなる。鬱閉度0.5以上の林縁を保証し、保護する必要がある。

表1. 紅花尔基クロライチョウ冬季生息環境状況と利用

生息環境樹木	出現羽数 (計171)	出現頻度%	海拔	出現羽数	出現頻度%
砂地-アカマツ林	16	9.4	500m以下	28	39.8
草類-アカマツ林	26	15.2	500~700	71	41.5
草類-カラマツ林	30	17.5	700m以上	32	18.7
ツツジ-カラマツ林	9	5.3	雪深	出現羽数	出現頻度%
草類-シラカバ林	43	25.1	50cm以上	42	24.6
ツツジ-シラカバ林	5	2.9	30~50	57	33.3
草類-デロ林	4	2.4	30cm以下	72	42.1
河岸-デロ, ヤナギ林	26	15.2	鬱蔽度	出現羽数	出現頻度%
耕地	12	7.0	0.3以下	5	2.9
斜面	出現羽数	出現頻度%	0.3~0.5	63	36.9
上位	24	14.0	0.5~0.8	103	60.2
中位	45	26.3	道路, 村落間距離	出現羽数	出現頻度%
下位	102	59.7	100m以内	9	5.3
日向	58	33.9	101~500m	38	22.2
東南又北西向	35	20.5	501~1000m	85	49.7
日陰	78	45.6	1001~5000m	27	15.8
			5000以上	12	7.0

営巣環境の選択

クロライチョウは適応性が強く、生息環境は広範で、したがって営巣環境の選択幅も広い。塞罕坎の森林でのクロライチョウの営巣環境選択はけっして一様ではなく、いかなる環境でも彼らの巣を見つけることができる。巣によって、探すのが困難なほど草木に覆われた巣もあり、簡単に見つけだせる程度に露出し、日光に曝されている巣もある。調査中発見した32の巣(表2)について、接近して営巣場所から逃げ出した距離は、ほとんどが2km以内であり、その90.6%が1km以内であった。その距離の遠近は生息環境および群れの大きさと関係がある。生息環境の質が高く、面積が小さく且つ個体数が少ないと、行動圏が集中し、この反対では遠くなる。

クロライチョウは好んで集まり、繁殖期に巣が集団的に分布し、しかも、隣接した雌鳥間に争いのない状況ができる。したがって、生息環境上から見るとクロライチョウは営巣環境の選択条件に寛容である。これをまとめてみると、

1. 彼らの生息地のさまざまところで巣を見つけることができる。
2. 営巣環境は林縁、林内を問わない。

3. 営巣する場所は喬木、灌木、草叢あるいは倒木の下、ときには大木の根元に営巣することもある。

4. 巣は必ずしも隠蔽するものの中であることはなく、人との距離も遠近まちまちで、植被の鬱蔽度、巣の高さなどに関わりなく様々な場所に見られる。

これは塞罕坎林区の個体群密度が高いことと関係があり、同時にクロライチョウの適応性が強いともいえ、したがって様々な環境の下で巣が見られる。

クロライチョウの巣は、単相カラマツ林あるいはカラマツ-シラカバ混交林中のカラマツの下に28%と最も多く、次いでシラカバの下に25%であった。鬱蔽条件も様々で、灌木林中あるいは低くY字状に延びた枝下に営巣したもの、ときには全く覆いがなく、露光にさらされたもの、また3~5巣が一ヶ所に集まって作られているものもあった。

表2 クロライチョウ営巣場所選択と警戒域

生息環境	海拔/m	斜度/°	接近可能距離/m	道路よりの距離/m	巣の場所	巣の数	%
カラマツ林	700~1100	10~20	50~200	30~500	カラマツ	6	18.7
カラマツ林	1000	15	1000	200	倒木	1	3.1
カラマツ林	800	5	500	600	砂地	3	9.4
カラマツ混交林	700~800	10~20	2000	50~2000	カラマツ	3	9.4
二次林	800	10	1500	80	シラカバ	5	15.5
二次林	750	8	1	1000	ズミ*	2	6.3
草類-シラカバ林	700	3	800	1000	シラカバ	3	9.4
草類-シラカバ林	700	3	600	1500	灌木	4	12.5
ヤナギ叢	600	平地	1800	2000	ヤナギ叢	2	6.3
草類-耕地	600	平地	600	100	草叢	3	9.4
合計	600~1100	0~20	1~2000	30~2000		37	100

訳注

*マンシュウズミ (*Malus baccata*) 中国東北部, シベリア, 朝鮮, 樺太に分布